

キーワード

プロジェクト

株式会社 都市機能計画室/POUF

コミュニケーション/ リレーションズ(関わりづくり)のデザイン

株式会社都市機能計画室(POUF-Planning Office for Urban Function)は、都市における公共的な機能について、リサーチや編集を活用して、その実現や運営のサポートをします。施設計画や運営のための住民・関係者ワークショップや情報発信、シティプロモーションや都市課題対策の戦略立案や実現などを業務としておこないます。

604-8261 京都府京都市中京区式阿弥町130 SHIKIAMI CONCON no.2

+81-(0)75-963-6010

info@pouf.co.jp

_

www.pouf.co.jp

代表取締役

榊原充大(さかきばら・みつひろ)

1984年愛知県生まれ。2007年神戸大学文学部人文学科芸術学専修卒業。

2008年から2023年まで、建築リサーチ組織「RAD」共同運営。

建築や都市に関する多様な相談を受け、調査・執筆、提案、

チームビルディング、プロジェクトディレクション/マネジメントなどの役割を担い、

アイデアからプロジェクトの実現までをサポートします。

主な実績

- ・ 奈良県斑鳩町立図書館との協働による斑鳩の記憶アーカイブ化事業企画実施(2012年-)
- ・愛知県岡崎市QURUWA戦略情報発信検討業務及びパブリックリレーションズ(2016年-)
- ・京都市立芸術大学及び京都市立銅駝美術工芸高等学校移転整備工事リサーチ・機運醸成チームマネジメント(2017年-2023年)
- ・ 兵庫県あかし市民図書館ほんのまちづくりプロジェクトたこ文庫企画および運営(2018年-)
- ・千島土地によるアート複合施設 Super Studio Kitakagaya (SSK) 開設ディレクションサポート(2019年-2020年)
- ・都市デザイン事務所ハートビートプラン(HBP) PR計画コンサルティング(2019年-2021年)
- ・ 大阪府泉大津市立図書館リニューアルプロジェクトリサーチチームマネジメント(2020年-2021年)
- ・大阪府泉大津市(仮称)小松公園(現:シーパスパーク)整備事業基本設計・実施設計時リサーチチームマネジメントコミュニティ形成支援事業企画実施(2020年-2024年)
- ・神奈川県厚木市新市庁舎設計時の市民参加型ワークショップあつぎ過ごすラボミーティング企画運営(2021年-2022年)
- ・コスメブランドSHIRO新工場づくりにおけるコミュニティデザインサポート(2021年-2023年)
- · 長野県小諸新校施設整備事業基本計画策定支援業務(2022年-2023年)
- 有楽町アートアーバニズムプログラム「YAU | PR計画 (2022年-)
- ・京都市新たな空き家利活用促進業務(2022年-)

編集協力=斧澤未知子 | デザイン=Rimishuna

キーワード

プロジェクト

都市機能計画室/POUFの キーワード

コミュニケーションの場をつくる

- 公共的なプロジェクトにおいて、対話を重ねてつくるプロセスが年々 重要になっているように感じます。通り一遍のワークショップでは ない、よりよい設計を目的とした対話の場をつくるために、POUF ではヒアリングする、立場の違う人同士が話せる場を設ける、ワー クショップをする、アンケートを取るなど、橋渡し役となって必要な 声を拾い上げるサポートをしています。

このようなコミュニケーションを設計活動の一部として設計者がおこなうことはひとつの理想です。一方で設計業務で求められる仕事量は膨大で、対話が必要最小限になってしまう場合も出てくるでしょう。

POUFは、そんな設計者と利用者、発注者の間に入ることで、コミュニケーションを持続し、より創造的で豊かな対話をつくり出します。

リレーションズ――関わりしろをつくる

- 「リレーションズ」とは、施設がつくられる地域の方々に「このプロジェクトは私も関わっていいんだ」「これはぜひ協力してやろう」と思ってもらえるように「関わりしろ」をつくることを指します。 言い方を変えると、「自分はここに関わった」と言ってくれる人が可能な限り多くなるようにするのが、POUFの役割のひとつです。

- リレーションズによる関わりしろを通してプロジェクトに参加した人が、自分が動くことによってまちや施設を好きになることが、結果的にまちに活力を与え、施設を自分達の誇れる財産として生かすことにつながっていくのだと考えています。

公共的なプロジェクトにおいて必要なものである一方、多くの場合 手を回しきれていない部分でもあるリレーションズを、POUFがお 手伝いします。

可視化する

可視化する対象には、目標、道筋など色々ありますが、プロジェクトでは「見えていなかったものを見えるようにする」ことが大きな役割を果たします。

プロジェクトの中ではいろいろな方の声に耳を傾けますが、必ずしもそれで直接的に答えが得られるわけではありません。適切な言葉をまだ見つけられていないという人たちもいるはずで、その声の中から見えていなかったものを見つけ出して形にし、しっかりと仮説を立てて検証し、結論を導き出して、戦略を立てる。このプロセスが、プロジェクトを進める中で重要だと考えています。

可視化する過程も、リサーチする、話を聞く、ワークショップをする、 と方法はさまざまです。

戦略的に伝える

- 公共的なプロジェクトを進めていくには、「知ってもらう」ことがとて も重要です。そのための情報発信も、方法次第で伝わり方は全く違 ってくるため、POUFでは情報発信の際に「戦略を立てる」ことを 考えています。

また、情報発信の際に情報をしっかり編集し、デザイナーと協働して人に伝わりやすい情報の形をきちんとつくることを心がけています。より多くの人に関わってもらうことが重要なプロジェクトにおいて、入りやすい入り口をつくるために効果を発揮します。

適切な情報発信は、一方的に何かを知らせる手段をこえて、コミュニケーションの手段として機能します。

- プロジェクトの性質や地域の特徴はプロジェクトごとにさまざまなので、その都度適切で効果的な情報発信の形を考案することも POUFの仕事のひとつです。

2

キーワード

プロジェクト

斑鳩の記憶アーカイブ化事業

奈良県斑鳩におけるまちの資源を可視化するためのワークショップを、建築リサーチ組織RADとして、斑鳩町立図書館、そして京都大学地域研究統合情報センター(CIAS、当時)との三者共同で、企画運営し、その結果を反映するためのデータベースを構築しました。現在では、RADから弊社が引き継ぎ、斑鳩町立図書館、そして金沢大学所属の研究者谷川竜一氏との連携で継続しています。

協力期間

2012 -

_

協力内容

アーカイブサイトの構築、 ワークショップ企画運営

_

クライアント

斑鳩町

_

パートナー

阿部研二

_

アウトプット

ウェブサイト

成果物として、今回のワークショップで収集した古写真や地域の声を蓄積し、より多くの方に楽しんでいただいたり利活用していただくためのデータベース「Chienowa Ikaru」を構築。本ウェブサイトではキーワードに応じた抽出、地図からの絞り込みが可能となっています。

にして、斑鳩の文化的風景を再構成することをめざします。

http://archive-ikaruga.org/

また、ワークショップの副産物として、斑鳩のある日を写真からたどる、「新聞」ならぬ「旧聞」を作成。参加者に配布しました。

このデータベースは、地域の人が持っている地域の風景を撮影した写真などの資料を蓄積するためのものであり、単に資料として写真を蓄積するだけではなく、個々の資料にまつわる地域の人の「声」とあわせて参照できるようにしています。各写真にタグをつけることで、関連する資料が連鎖し、アーカイブを見る体験がより回遊性を持つようデザインしています。











キーワード

プロジェクト

愛知県岡崎市 QURUWA 戦略パブリックリレーションズ

愛知県岡崎市、名鉄東岡崎駅前を流れる矢 作川支流の一級河川である乙川周辺に位置 する公共空間を結んだエリア「QURUWA を中心に都市開発がおこなわれる中、POUF はパブリックリレーションズのためのリサー チ・戦略づくり・実現やウェブサイト構築と運 用などを担当しました。

協力期間

2016 -

業務内容

リサーチ、情報発信ディレクション、 ウェブサイト提案・運用ディレクション

クライアント

岡崎市

パートナー

合同会社バンクトゥ、桑田亜由子、 neucitora など

アウトプット

レポート、ウェブサイト、その他

QURUWAには「ここにいけばエリアの情報が全部わかる」と いう情報媒体がなかったため、「入口」になるような ウェブサ イトを制作することになりました。すぐに制作に取り掛かるの ではなく、QURUWAのために望ましい情報発信の形をリサ ーチした上で戦略を立てて取り組むことに。2年間のリサーチ 期間である検討業務から、オンラインコミュニケーションの専 門家として、合同会社バンクトゥとチームを組んでいます。

検討業務は2段階で実施しました。1年目はQURUWAに必要 とされている情報発信の形を検討するためのリサーチで、岡 崎市の現状の情報発信方法や地元の媒体の種類を洗い出し て課題を見つけつつ、他市の事例も研究。岡崎市のLINEアカ ウントを利用した市民アンケートも実施し、1000名以上から の回答を得ることができました。

プロジェクト2年目はサイト実現に向けて、1年目のリサーチ 結果を具体的に整理。ウェブサイトを地域のクリエイターと連携し て運用すべく、連携先候補へのヒアリングなども実施しました。

完成したウェブサイト「QURUWAと、「には、QURUWAの日常 を見てもらうよう、イベント時の華やかなまちの様子だけでは なく、地域の方々が「特別じゃないけれど好き」と思える「ふつ うの日」の風景をトップページに掲載。ゆくゆくは投稿機能も 想定し、ウェブサイトをプラットフォームとしてまちに関わるこ とができる開かれた「関わりしろ」をつくり出そうとしています。

外から見たときのQURUWAの情報発信という側面はも ちろん保ちつつ、内の人たちのコミュニケーションを促して、ま ちへの認識や愛着を高めることで、まちとしての魅力もより高 めることをねらいとしています。







キーワード

プロジェクト

京芸・銅駝移転 プロジェクトリサーチ・ 機運醸成チームマネジメント

京都市立芸術大学(京芸)と京都市立銅駝 美術工芸高等学校(銅駝)を、JR京都駅東に 位置する崇仁地域へと移転するプロジェクト。2017年の設計者選定プロポーザル時 に代表榊原が別途運営するリサーチ組織 RADメンバーとして参加した、5社の建築 事務所からなる設計企業共同体(ジョイント ベンチャー= JV)が設計者として選定されまし た。榊原はリサーチ・機運醸成チームの窓 口をつとめました。2023年にリニューアル オープン。

協力期間

2017-2023

業務内容

リサーチプランニング、リサーチ、 プロジェクトマネジメントなど

クライアント

乾·RING·フジワラボ・o+h·吉村設計共同体

パートナー

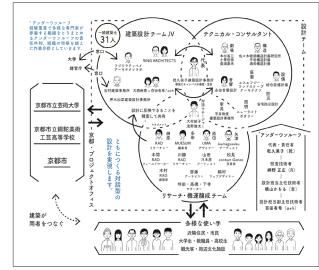
UMA design farm、MUESUM、 齋藤歩、矢津吉隆、山田毅、松見拓也、 フロッツカーネル、RAD、下寺孝典、 垰田ななみ、高橋藍ほか プロポーザルの募集要領の中では「対話」が重視されていたことから、リサーチ・機運醸成チームをJV内に組み込む提案をおこないました。その中で、JVと地域の方々との対話機会の窓口や、設計の中で求められる「対話」のあり方を検討したりリサーチプランを立てたりするマネジメントなどを担当しています。

一 リサーチ・機運醸成チームは、デザイン事務所 UMA design farm、編集事務所MUESUMのほか、京芸のOBである矢津 吉隆、当時同大学博士課程在学中だった山田毅、アーティストでもある写真家の松見拓也、アーカイブの専門家である京都大 学総合博物館の齋藤歩、ウェブサイトの制作をおこなうフロッツカーネル、京都の近隣大学の学生有志などによって組成された 10人ほどのチーム。リサーチチームの定例会は月一回程度のペースで開催しました。

一リサーチ・機運醸成チーム定例会では、現在進行形で京都で進んでいる事業などの情報を集め、より詳細にリサーチすべき対象を検討しました。具体的なリサーチとしては、地域住民、大学教員・学生へのヒアリングサポート、京都の大学内でのアクティビティリサーチ、京都のアートスペースやシェアアトリエの調査、イベント年表制作などを実施しています。東京のJVオフィスに「リサーチウォール」という壁面を設け、これらリサーチの結果をアップデートしていきました。

このプロジェクトでは、情報の公開を慎重におこなうため、JV内 だけでオープンなウェブサイトを構築・運営し、リサーチなどを通 して得られた地域に関する情報を設計のために共有しました。

一学生が共通に利用する工具をシェアするためのシステムをリサーチし、芸大側に対してプレゼンしたり、新しい購買部の形や新しいライブラリを提案するなども実施。解体される敷地内の小学校にまつわる展示を地域の方や大学と連携しておこないました。













概理

キーワート

プロジェクト

アート複合施設

「Super Studio Kitakagaya」 開設ディレクションサポート

大阪府住之江区の北加賀屋エリアに多くの物件を持つ不動産会社千島土地株式会社が所有する倉庫を、アーティストのためのシェアアトリエを含む複合施設としてリノベーションするプロジェクト。POUFはクライアントである千島土地の担当者とともに施設設計のための要件整理などをおこない、ディレクションサポートを担当しました。

協力期間

2019-2020

_

業務内容

ディレクションサポートなど

_

クライアント

千島土地株式会社

_

パートナー

前田健治など

1-

千島土地は2011年から「おおさか創造千島財団」という財団を運営しながら、北加賀屋エリアをアートのまちにすることを掲げ、「NAMURA ART MEETING」などの有識者会議もサポートしてきました。Super Studio Kitakagaya(SSK)は、大阪でアーティストがよりよく制作・発表する環境が少なくなっているという危機感を背景に、施設づくりのためのディスカッションではそういった想いをすくい上げる機会となりました。

0

SSKではアーティストが「つくり続ける」ことへの支援をコンセプトに据えています。アトリエとなる個室空間をできるだけ多く用意し、中には滞在制作が可能な部屋も備え、工場の名残であるウィンチもアーティストの制作ツールとして活用できる形で残しています。

制作のスタジオだけではなく、展示ができるギャラリーや フードクリエイターが利用できるキッチンなども新たにつくり、 地域の方が立ち寄って楽しめる場所を目指しています。

3 —

千島土地側の「アーティストが使える制作場所をつくりたい」という希望からはじまり、どういう施設にしたいかをヒアリングし、参考事例やPOUFからの提案を交換しつつ話し合いを重ね、施設に必要な空間、ゾーニングなど具体的な仕様をまとめていきました。並行して、連携するデザイナーの提案、ウェブサイトのディレクションなどをおこないました。

企画に合った設計者もPOUFから提案し、設計施工は株式会社TANKが担当。設計が進む中で、クライアントとPOUFが立てたコンセプトの確認も並行しておこないました。









キーワード

プロジェクト

大阪府泉大津市立図書館 設計時コミュニケーション& 開館支援業務

大阪府泉大津市の新図書館の設計時に関係者に向けたコミュニケーション機会をつくり、開館に向けて地域内外の方々にとっての関わりしろをつくるプロジェクト。リサーチ組織RADとして設計者選定プロポーザルから連携し、選定後には情報発信やワークショップの企画・運営のほか、設計チームのフジワラボ・トミト設計共同体が考案したツールを使った市民参加型フィールドワークの運営、フィールドワークをもとにした市役所への提案資料の作成などを弊社で担当しました。

協力期間

2019-2021

_

協力内容

リサーチプランニング、プロジェクトマネジメント

_

クライアント

フジワラボ・トミト設計共同体

_

パートナー

フジワラボ・トミト設計共同体、

UMA design farm,

MUESUM、阿部研二

_

アウトプット

レポート、ウェブサイト、その他

「機運醸成」とは、施設が新しくできたりリニューアルしたりする際に、地域内外の方々に周知しながら開館に向けての意識を共有してもらうという考え方。その方法はさまざまで、設計内容を紹介する会を開催したり、チラシ配布やニュースレターの発行をしたり、フィールドワークなどをおこなったりすることで、地域内外に向け「新しい施設ができる」という機運を高めています。

設計時には、設計チームが東京拠点のメンバーということもあり、まちのことを知るためのフィールドワークを実施。共同体のtomito architectureが考案した「まちの素材カルテ」と呼ばれるツールを使いながらまちを歩いて泉大津らしい建物やまちなみを探すと同時に、出会った方々からお話を伺うことも。フィールドワークにはSNSでの呼びかけや市役所からの広報によって、関西圏の学生や地元の若い方も多数参加されました。この作業をとおして、参加者の街への認識が深まることで設計の説得力が増すと同時に、利用者の施設に対する解像度も増すことをめざしています。

全3回のフィールドワークの後、成果を市民の方々に向けて発表する会を開催。市役所などを通じた告知で30-40人ほどの方々が来場。またその後、バスを貸し切って市民有志の方々と近隣の事例を視察に行くツアーも実施しました。このような段階を経ることで、建築をつくる側と使う側が同じ目線を共有することができ、新しい図書館に対して一緒につくっていく関係を構築することができると考えています。

設計が終わったあとに機会を止めてしまわず、開館支援業務 発信の一環で、地域の方々へのヒアリングをラジオコンテンツ として発信。機運醸成のプランニングをおこないマネジメント を実施しました。

5----

並行して、新図書館内にできる地域産業を紹介するショップ「CO-ON」を地元商工会議所らとともにつくるマネジメントをし、ウェブサイトも制作しました。











キーワード

プロジェクト

都市デザイン事務所 ハートビートプラン(HBP) PR計画コンサルティング

大阪を拠点にまちづくりのコンサルティングをおこなう都市デザイン事務所「ハートビートプラン (HBP)」の対外向けのブランディングと情報発信を進めていくためのリサーチ&提案プロジェクト。弊社はHBPのビジョンを表現する言葉を探すためのワークショップを企画・運営しました。

協力期間

2019-2021

_

協力内容

ワークショップ企画運営、 コンサルティング、編集

_

クライアント

有限会社ハートビートプラン

_

アウトプット

レポート

)

都市デザイン事務所ハートビートプラン(HBP)はまちづくりのコンサルティングを各地で手掛けていますが、社員増加にともなう意識共有と、情報発信に課題を感じていたそう。業種が近く編集業務もおこなう弊社に、自分達のことをよりよく表現するためのパートナーとして依頼がありました。弊社は担当者へのヒアリングをもとに、忙しい社員間のコミュニケーションの場をつくるためにワークショップを運営し彼らからの言葉を引き出しつつ、編集者的な視点でそれらをまとめる役割を担いました。

2

プロジェクト当時、HBPの社員は10数名ほど。メンバーと15回のワークショップを実施し、毎回3時間ほどの時間の中で、「そもそもHBPはどういう職種だと言えるのか?」「仕事上のライバルといえる相手は誰になるだろうか?」と考えてみたり、ディスカッションから「HBPらしい単語」を探してHBP辞典をつくったり。さまざまなアプローチでHBPがどういうチームなのかを炙り出していきました。

3-

最終的な成果はレポートとして納品。その後HBPは自社サイトのリニューアルをおこないますが、その制作のリファレンスとなりました。レポートでは、ワークショップを通して見えてきたHBPのビジョンなどを整理し、キャッチコピーやテキストとしてまとめています。テキストをまとめる際にも、HBPに興味を持ちウェブサイトを見ることになったひとりひとりが「関わりしろ」を持てること、すなわちリレーションズが発生することを意識しています。





キーワード

プロジェクト

大阪府泉大津市 (仮称)小松公園

(現:シーパスパーク)整備事業 基本設計 実施設計時 リサーチチームマネジメント コミュニティ形成支援事業 企画実施

大阪府泉大津市の市民会館跡地を公園に リニューアルするプロジェクト。リサーチ組 織RADとして設計者選定プロポーザルか ら連携し、選定後、弊社が窓口になり実行 しました。設計段階ではワークショップや活 用実験、そして情報発信の企画運営を担当 し、施工段階では公園運営に向けたチーム ビルディングのサポートをおこないました。 2023年6月に開園し、開園後は公園運営 組織シーパスパーク・クラブの「コンセプト」 や「ルール」づくりやパンフレットの作成を サポートしました。

協力期間

2020-2024

協力内容

リサーチプランニング、 プロジェクトマネジメント、 チームビルディングサポート、情報発信

クライアント

(仮称)小松公園パートナーズ共同企業体

パートナー

E-DESIGN、桑田亜由子、中谷利明、山根香、 桜木美幸、オカモトアユミ、追立大地ほか アウトプット

レポート、その他

2020年に実施された「(仮称)小松公園整備事業基本設計・実 施設計業務委託に係る公募型プロポーザルーにて協力する共 同企業体が選定され、すぐに4回の市民ワークショップ「設計 者と囲む、小松公園アイデアテーブルーを実施。コロナ禍の中 での実施に慎重を期し、毎回100名近い方々に参加いただき ました。3回目には更地となっている敷地を使い、市民有志 の方に「やってみたいこと」を試してもらう活用実験を開催し ました。

2021年度には今後2年間の提案を求める「(仮称)小松公園整 備事業に伴う地域コミュニティ形成支援外業務」のプロポー ザルに取り組み、選定いただいた後にフォーラムの配信、そし て「(仮称)小松公園使いこなしサミット!」と題した、公園運営 に向けたワークショップを実施しました。活用実験から一歩進 めた「プレフェス」を2021年11月に実施し、だんだんとワーク ショップや「フェス」の運営を市民のみなさんにバトンパスし、 POUFはそのサポートを担当しました。

2022年4月には市民主導による「完成待てない!新しい公園 に向けてのフェス!」を開催し、約5000人もの入場者を数え ました。その際には市民公募し投票で選ばれた公園の新名称 「シーパスパーク」を公表。その後も公園運営のためのワーク ショップを重ね、2023年には市民による公園運営のための組 織「シーパスパーク・クラブ」が発足しました。

2023年度にはシーパスパーク・クラブの運営でワークショップ を実施し、シーパスパーク・クラブの「コンセプト」と「ルール」 を決定。シーパスパーク・クラブ入会を呼びかけるパンフレット に反映して、その作成のサポートをおこないました。





キーワード

プロジェクト

京都市新たな空き家利活用促進業務

京都市に106.000戸ある空き家のなかで、 賃貸や売却の予定がなく活用意向のない住 宅である45.100戸の「その他空き家 | (平成 30年住宅・土地統計調査)をどのように流通/ 利活用させるか、という課題に取り組むプロ ジェクト。2022年実施のプロポーザルに弊 社が代表となり、株式会社ぬえ、合同会社 バンクトゥとともに提案し選定いただきまし た。まずは選考事例のリサーチをメインに、 空き家を「課題 | としてだけではなく「可能 性」ととらえる視座を重視し、「価値はユーザ ーが選ぶ」をテーマに「Kyoto Dig Home Project」という名称を提案しました。 掘り 出し物を探る「Dig」という音楽文化から生 まれた概念を援用しています。引き続き選定 いただいた2023年度にはウェブサイトの構 築や、視察先のみなさんを京都にお越しい ただくイベントなどを実施しました。

協力期間 2022-

協力内容 戦略立案、チーム組成、 プロジェクトマネジメント

クライアント 京都市

パートナー 株式会社ぬえ、合同会社バンクトゥ、株式会社タンサン、川嶋克、YAKUMI、中谷利明ほか

アウトプット レポート、ウェブサイト

日本全土で社会課題となっている空き家問題に取り組むプロジェクト。「町家」のようにすでに価値づけられ、市場でも多く取引されている物件ではなく、京都市に106,000戸ある空き家のなかで、賃貸や売却の予定がなく活用意向のない住宅である45,100戸の「その他空き家」(平成30年住宅・土地統計調査)が対象となります。「若者・子育て世代」の転出が増加する今後は一層、そのままで空き家が「なんとかなる」ような状況ではなくなっています。

2022年実施のプロポーザルでは、ブランディングやプランニングを得意とする株式会社ぬえ、情報発信を得意とする合同会社バンクトゥとチームをつくり提案。「空き家利活用促進」という取り組むべき課題は明確なものの、何をどのようになすべきかが定まっていないなかで適切なステップを計画し、実践できるチーム組成をおこないました。

プロポーザル選定後は、まずリサーチとして視察やアンケートを実施。視察ではいわゆる「空き家対策」だけではなく、「地域活性」や「まちづくり」など、副次的に空き家が活用されているだろう事例まで広げ、プロジェクトチームが持つ全国のネットワークを駆使して、視察先を選定しました。

約20箇所をめぐり、関係者との長く対話を繰り返すなかで、 地域によって課題や対応方法は全く異なるものの、空き家を 「課題」としてだけではなく「可能性」として認識する視座の重 要性を実感しました。

空き家の利活用を「数」の問題とすると無理難題に見えますが、「価値観」の問題として新たに設定し直してみようというのがわれわれの試みです。スペックが重視されがちな既存物件に居心地の悪さを感じているユーザーに、新たな選択肢として空き家を提案すること。掘り出し物を探すという音楽文化由来の概念「Dig」を援用し、「価値はユーザーが選ぶ」を謳う「Kyoto Dig Home Project」という名称を新たに生み出しました。







京都市新たな空き家利活用促進業務

5

6

2023年度にも実施されたプロポーザルで選定いただき、継続関与の利点を活かして、「Kyoto Dig Home Project」を象徴するウェブサイトを構築。「空き家所有者」と「利活用するユーザー」というターゲットを設定し、それぞれに向けた2つの顔を持つウェブサイトです。独自の空き家活用を実践するプレイヤーに具体的な改修方法をうかがったり、空き家を手段として新たな取り組みを進める方々にどのような価値観で実践しているのかをうかがったりするウェブコンテンツも制作。専門家と連携した動画もつくりました。

プロジェクト

キーワード

概要

- また、2022年度に訪れた視察先の実践者のみなさんを京都 に迎えた「京都空家会議 KYOTO DIG HOME SUMMIT」も 実施。各地のプレイヤーたちと連携しながら、さらに展開を進 めていきます。



